

民俗博物館だより

Vol. 30 No.1・2

2003. 12. 25



特別展「大和もめん」会場

目 次

【特別展特集】

特別展の紹介 「大和もめん」1

特別展における

「見て・聞いて・触れて・ためして」

展示を理解するための試み5

特別講演会

近世農民の知恵 — 綿作と「まわし・ならし」 — 8

【民俗博物館の新企画展】

特別陳列「四季おりおりの民具」11

特別展の紹介

大和もめん

大和の農民はなぜ田に綿を植えたのか？
大和緋はなぜ生まれたのか？

横山 浩子

「大和もめん」を御存知でしょうか。狭義には、大和（特に盆地部）で生産された木綿織物を指しますが、その基盤には奈良盆地及びその周辺部で広く行われた商品作物としての綿栽培の歴史がありました。

今回の展示では、大和の綿業（綿花、綿糸、綿織物の生産）の総体を「大和もめん」として捉え、凡そ17世紀から20世紀に至る大和と木綿の関わりを歴史を紹介いたします。近世～近代に至る一時代、この地のそこそこに白い綿の吹く季節があり、どの家々からも軽やかな機織りの音が響いた日があったことに思いを馳せていただく機会となれば幸いです。

展示構成と主な内容

①衣料革命—木綿の時代 はじまる—

庶民の衣生活における「麻から木綿へ」という基本素材の大きな変化

木綿という素材が登場する以前、庶民層の基本衣料素材は麻（大麻・苧麻）を中心とする草木の内皮から取り出した繊維（靱皮繊維）でした。繊維を細長く裂いて、それを繋ぎ合わせて糸にする麻と、繊維の短い綿では糸を作る方法も違い、保温性や肌にふれる感触も異なっていました。

こうした麻と木綿の素材としての違いや、糸作りの工程とその用具の違い等を感じていただければ、と思います。

木綿製品は、今日私達の生活のいたるところにあるので、木綿がなかった時代、またはじめて木綿を手にした人々の心を想像することは容易ではありません。木綿という魅力的な素材が新たに登場するによって、人々の暮らしの中に生じた変化は、ほどなく誰もそれとは気付かぬうちに、あたかもはじめからそうであったかのようになじんでしまいましたが、実は、池に投げられた小石のように波紋を広げ、やがて時代を動かす大きな推進力ともなっていたのです。

<主な展示品>

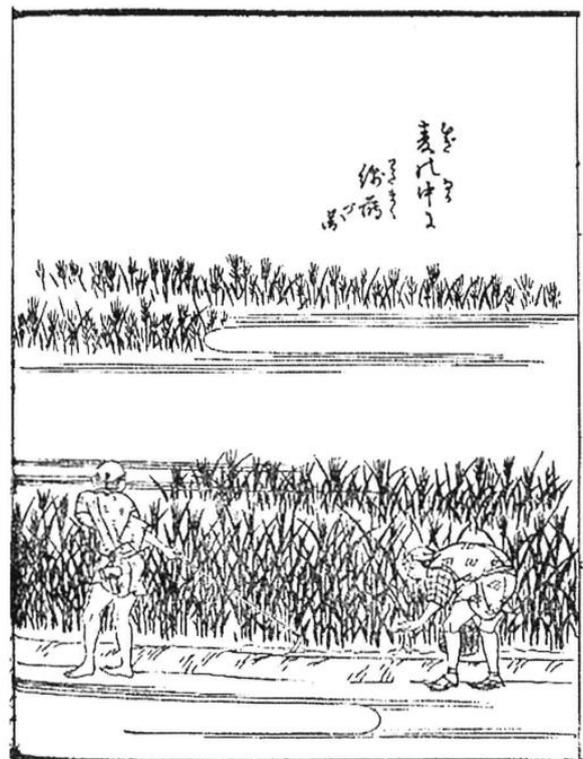
大麻、苧麻の繊維（精麻）、苧糸、オモケ（苧桶）、ツム、フジベソ（藤糸）、フジコギノ（藤布の仕事着）、大麻生布、実綿、繰綿、モメンノツム（木綿糸）、モメンガセ（木綿手紡苧糸）

②奈良盆地の綿作—作りまわしの知恵—

大和が畿内における代表的綿作地域の一つであったこと、またその栽培の普及は、大和の風土と深く関わっていたこと

大和の綿作の特色の一つは、共同体の強い規制のもとに、村落内において定められた水田を一定周期で場所を移しつつ乾田化して行われる「作りまわし」によっていたことです。それは、慢性的になやまされてきた水不足解消法であるとともに、開発し尽くされ、耕作地として余地の殆ど無かった奈良盆地で、限界まで推し進められた集約的な土地利用法でもありました。

当館が収集した奈良盆地の綿作の用具とと



▲麦の中に綿を蒔図（大蔵永常『綿圃要務』）挿絵より

もに、綿作の最も盛んだった高田、御所、北葛城郡地域の作付絵図や今回初出の綿作関係史料、宮堂村(現郡山市)にのこる75年間にもわたる貴重な稲作木綿作内見帳・毛分帳等、貴重な史料を多数展示いたします。

<主な展示品>

綿園要務、御所町・高田村・^{はじかみ}蓋村(現新庄町)・服部村(現斑鳩町)・宮堂村(現郡山市)等の稲作木綿作内見帳、毛分帳、作付絵図、底穴桶、鋤、テカラスキ、スジキリ、タネオサエ、ツチケズリ、コマザラエ、^{わたつみかご}綿摘籠、など

③棉から綿へ、綿から糸へ、糸から布へ

木綿の紡織工程と大和で用いられた用具の数々

かつて、綿業関係者の間では、植物体また種子のついたわた(綿花)、綿花を繰ること、繰り取ったあとの種子などには「棉」の字をあて、この「棉」を繰った以降のわたは「綿」の字で表す、というふうに使分けられていたようです。現在では、これらは全て「綿」の字で表現されるようになりました。このコーナーでは棉から出発して木綿布にいたるまでの加工工程と、手紡糸の時代の木綿製品を中心に展示します。

紡織は、衣生活を支えるのに不可欠な生活技術の一つでしたが、他のものに比して際立って複雑かつ体系だった技術といえ、時間と労力のかかるものでした。

一般に綿花から糸、布へと加工する工程

は、麻のそれに比べて作業が楽になったといわれていますが、それでも決して単純ではなく、多くの労力と様々な道具、根気と熟達した技術が必要でした。紡織工程の全体を見渡し、それぞれの作業内容を具体的にみてゆくと、これが分業化してゆく時流の必然性のようなものが改めて実感されます。

やがて各工程が専門化する中で綿繰器や綿打弓、糸車、織機など、効率化のために様々な工夫がなされてゆきました。今日残存する紡織用具のバリエーションの中に改良の足跡や地域性といったものをたどることができます。

<主な展示品>

御所市室八幡神社奉納四季農耕図絵馬

木綿紡織用具

綿繰器(座繰^{ざくり}・立綿繰^{たちわたくり})、綿打弓・槌^{すかご}・箕籠、糸車、^{かせぐるま}繰車、糸杵、糸繰器、ヘエダイ(整経台)、チキリ、トリイ、モジリダイ(綜紬作^{そうじゅう}り台)、^{おさひ}籽箱、管箱、篾、大和機など

木綿製品

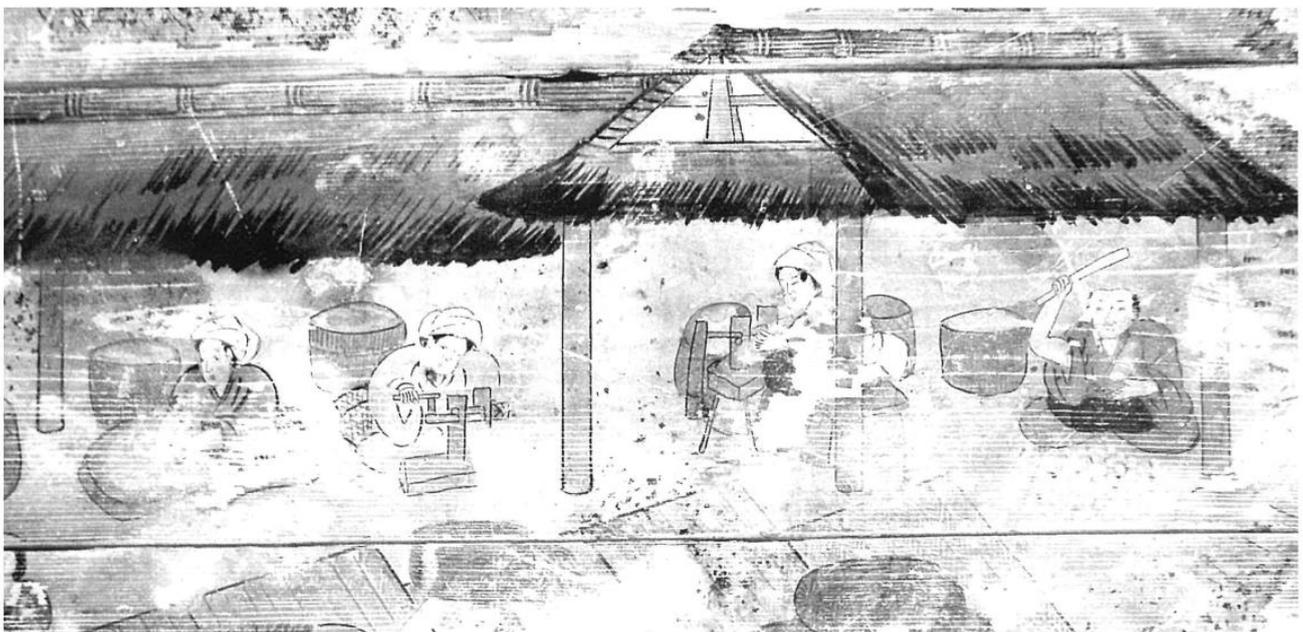
紺地桐鳳凰文様筒描蒲団^{つつがきふとん}、格子縞^{こうしじま}夜着、道中合羽^{どうちゅうがっぱ}、ショウゾクジバン(紺地幾何文様型染装束襦袢^{じゅばん})、五月節供職^{のぼり}

④綿が動く、人が動く

一綿の流通・木綿産業の成立一

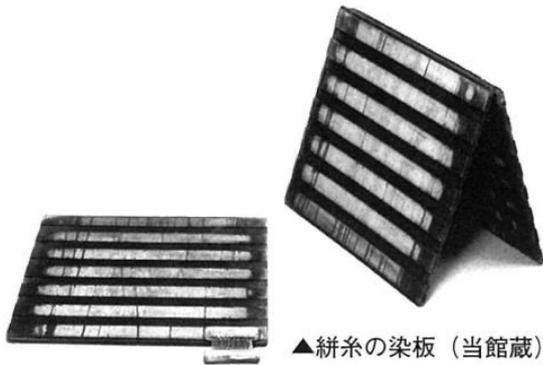
綿業を巡る物流の発達と綿商人の活躍、農村工業の芽生え

木綿は、幅広い層にわたって需要がある一方、綿栽培の浸透には地域格差があったので、



▲四季農耕図絵馬(御所市室八幡神社蔵)

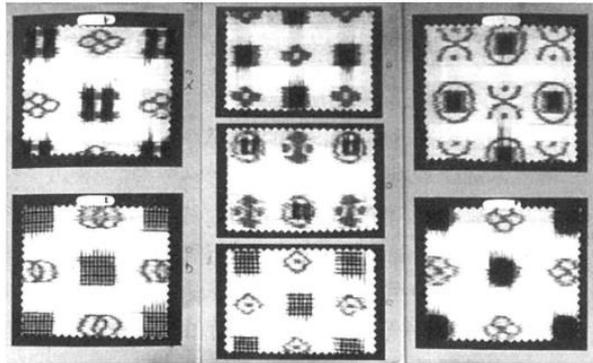
特別展「大和もめん」



▲ 絹糸の染板 (当館蔵)



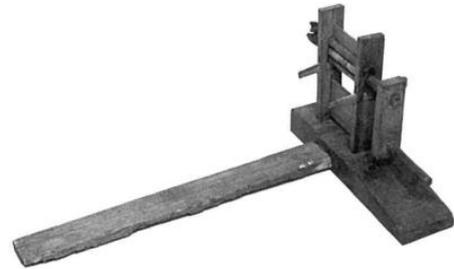
▲ 子供の羽織〈大和絣〉(当館蔵)



▲ 大和絣見本帳 (大森喜兵衛氏蔵)



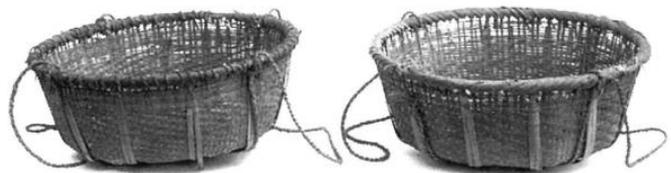
▲ 割込帳 (当館蔵)



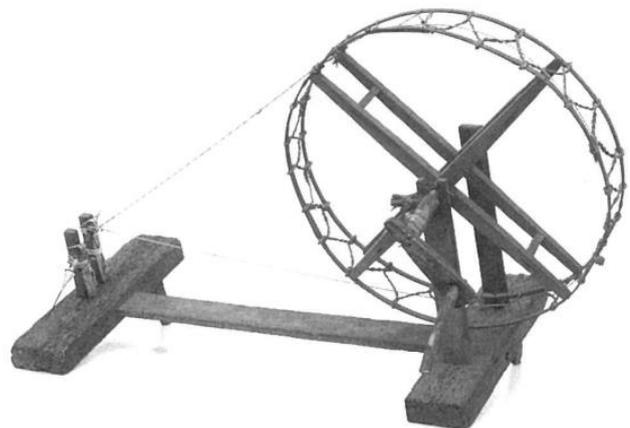
▲ シンコロクロ (当館蔵)



▲ 木綿桐鳳文筒描蒲団 (当館蔵)



▲ 綿摘籠 (当館蔵)



▲ 糸車、またビービーともいう (当館蔵)

早くから商品作物として取引されました。大和綿は、遅くとも17世紀後期には、関東方面へ実綿、繰綿くりわたの販売が行われ、多くの仲買や問屋商人が活躍しました。木綿が普及し、分業化が進むと、各地に染色業、織物の仕上げ業、道具を作る職人なども含め、各工程に関わる多くの業種が生まれました。綿を巡って、かつてなかったほど大規模にものが動き、人が動くようになったのです。

綿を栽培するには、大量の肥料が必要でした。奈良盆地では自給品だけでは足りず、大和川を通じてマコあぶらかす（綿の種から油をとった後の絞りかす）、油粕、干鰯ほしか等が移入されました。

大和では、18世紀後半期から、紡績や木綿織りなどの綿加工業が農村地域の副業として盛んとなってゆきます。村内にあって資本を持ったものが木綿商売を手掛けるようになり、近辺の在郷町はもとより、大坂の商人等とも取引を行うようになってゆきます。

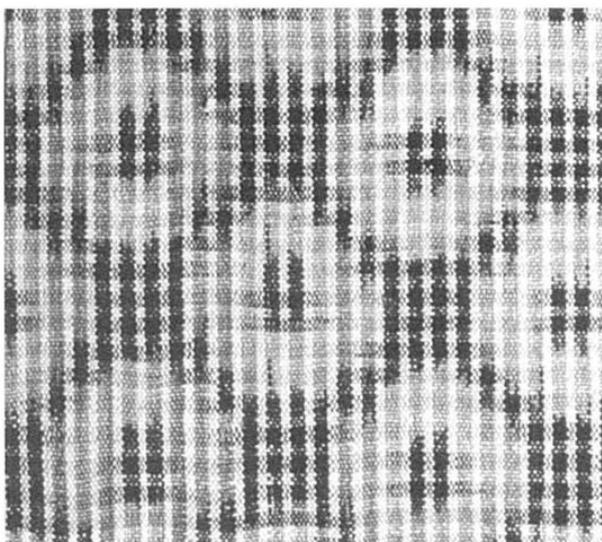
<主な展示品>

大和名所図会、西国三十三所名所図会、和州操（繰）綿問屋仲間家々小口銘版木、吉田屋「撰繰綿」版木、大和川運上図、楠家旧蔵木綿関係文書、木綿糸売買賃糸仕立値段表、菱垣新綿番船川口出帆図（写真パネル）など

⑤木綿織物業へ、新たな展開

大和における綿作の衰退と、木綿織物業の進展特にその代表である大和緋について

大和の綿作の衰退は、早くも18世紀後半より始まりますが、一方、木綿の紡織業が本格



▲あしべ緋（『第5回内国勸業博覧会記念染織鑑』より）

的に展開してゆきます。後に当地方の代表的木綿織物となった大和緋は宝暦年間（1751～63）御所の浅田松堂によって創始されたと伝えられています。

安政の開港を契機として、外国から良質で安価な綿花や綿糸が大量輸入されるようになり、幕末～明治維新を経て日本が近代工業化の道を歩み始める中、明治29年（1896）、綿の関税が完全撤廃されるに至って我が国の綿作は決定的な打撃を受け、終焉へと向います。

大和でも、稲と綿による作り回しの体系が崩れ、再び直面することとなった水不足問題解消のための新たな方策として、この頃各地で溜池たためいけの新たな築造や拡張が行われてゆくこととなります。

一方、木綿織物業は明治時代以降、原料を土産とさんの綿から外来綿や機械紡績糸の使用に移行しつつさらに盛んとなり、まさにこの時代（明治期後半）にピークを迎えました。木綿織物業は大和を代表する産業の一つとなり、ニットや靴下等の繊維産業へとつながってゆきます。

<主な展示品>

田原本町黒田いおど蘆戸神社奉納溜池築造絵馬、（山辺郡平等坊村）綿漬約定証、大和木綿型染蒲団地（吉崎コレクション）、大和緋見本帳、大和緋割込帳、宮座の衣装（素襖・袴）、ハタマキ（八反巻き）、整経機、ハタ集配箱、大和緋ゆかた浴衣、大和緋子供羽織、大和高田市曾大根西宮神社奉納四季農耕図絵馬、など

○期間中の催し

- (1) 9月20日 オープニングイベント（定員60名）
もめんのはなし～わたから糸への道具使い～
講師 古式綿打ち保存会主宰
寝具一級技能士 丹羽正行氏
- (2) 10月5日 特別講演会（定員60名）
近世農民の知恵～綿作と「まわし・ならし」
講師 大阪経済大学日本経済史研究所所長
大阪経済大学教授 徳永光俊氏
- (3) 10月26日 みんなくジャズコンサート
銀音じゃず楽団
奈良スイングジャズバンド
- (4) 11月8日、15日、16日（3日間連続講座）
体験学習「初歩のはたおり」（定員20名）
講師 帝塚山大学短期大学部講師 澤田絹子氏

大和もめん展における

「見て・聞いて・触れて・ためして」展示を理解するための試み

横山 浩子

はじめに

特別展「大和もめん」では、綿（木綿）栽培や加工工程についての知識が、展示全体へのより深い理解に通じる鍵ともなり得ますが、その際一番問題となるのは、その技術的側面が一般の人にとっては非常に難解なことです。

ワタという植物を見たこともないという人も多く、ましてこれを糸にし、布に織ることを目にする機会は日常の中では殆どありません。紡織のプロセスはきわめて複雑で、機織りをしたことのない人に対してただ資料を陳列するだけでは、作業の手順を把握し、各工程の持つ意味や、それぞれの道具がどの場面でのどのように使われるのかといったことを伝えることは容易ではなく、却ってその煩雑さが展示全体への興味を削ぐことにもなります。

本展覧会の期間中、1. その道具が実際に使われている様子を見る（実演）、2. 展示されている道具を実際に使ってみる（体験展示）、3. 一連の作業工程を体験することでそのプロセスを理解する（体験学習講座）、といった企画を複合的に組み合わせることによって木綿の加工工程の理解に近づこうと試みました。

1. 実物にふれることのできる講演会

まず、オープニングイベントとして、「もめんのはなし－わたから糸への道具使い－」と題し、丹羽正行氏にご講演をお願いしました。氏は手仕事によるふとん作りの現役職人であるとともに、

江戸～大正初期頃まで行われていた木弓（唐弓）による綿打技術の継承に尽力され、世界各地にふとん作り、綿づくりの現場を訪ねて綿や綿打ち技術などについての調査、研究を続けておられます。幅広い知識をもとに、木綿についての基礎的なお話から我が国における木綿の歴史、栽培、わたから糸への工程とそこで使われる世界各地の用具とその違いなどについて、これまでに収集された世界各地の綿のサンプル、加工用具など多数の実物資料を示しながら、またこれを実際に使いながらの非常に具体的でわかりやすいお話をいただきました。さらに、氏のご好意で聴講者が自らそれら資料に触れ、綿打ちなどの体験をしていただくことができ、質疑応答も従来にない熱のこもったものとなりました。

なお、木弓（唐弓）の使用など殆どみることのできない貴重な機会であり、当日の様子をビデオで記録し、展示期間中來館者にも視聴していただきました。

2. 体験型の展示

展示室では、綿繰器、綿弓、糸車、織機を常置し、來館者に使っていただくコーナーを設けました。体験展示を行うにあたっては、道具の破損や部品の紛失などの懸念、期間中まかなえるだけの十分な材料の確保、道具の使用方法などを指導できる体制、などいくつかの問題点がありました。また、展示の中で想定されている時代の実物資料や同等の材料を用いるのが理想と考えますが、初心者に



▲丹羽正行氏



▲体験コーナー（綿繰り、糸紡ぎ）

とっては扱いが難しく、却って十分な体験ができないことにもなることを考慮し、今回ははじめての人にも存分に体験していただけるよう体験用の用具は新たに製作し、材料も、誤解を招かない範囲で扱いやすいものに変えて実施しました。

平日は、主に当館学芸員が対応にあたりましたが、来館者の多い週末、祝日には、当館が主宰する奈良曝研究会の会員、帝塚山大学短期大学部織物研究室（以下は「織物研究室」とさせていただきます）の支援を得て、ほぼ終日展示室に常駐し、来館者が以下の複数のメニューから自由に選んで体験していただける体制をとることができました。

<体験内容とその概要>

◆綿繰り

当地方でもよく用いられていた床面に座って片側に螺旋歯車をもつ轆轤をハンドルで回すタイプの綿繰器を用意しました。操作が比較的簡単なので、轆轤で指を詰めたりしないよう少しお手伝いをすれば、5、6才位の方から楽しく体験していただけます。

綿繰りに使う実綿は、当博物館の立地する大和民俗公園内で毎年栽培している和綿を数年にわたって貯め、準備しましたが、昨今、家で綿栽培をしている方もおられるので、自家の綿も持ち込み可としました。持参の綿は和綿に比べて毛足の長い米綿系の綿も多く、しかしこれは当館の用意したタイプの綿繰器では大変繰りにくいことがわかりました。「やはり道具はそれぞれの地域に適合するものが選ばれ、使われているのですね」との体験者の感想が印象的でした。

◆綿打ち

橿原市内で収集された木弓（唐弓）を展示したので、その説明用に同タイプの市販品（やや現代風にアレンジされている）も準備しましたが、木弓は専門職人の道具でもあり、大型で子供や女性には重すぎて使いにくいことから小型の簡易な綿弓を自作し、使用しました。

ふとん綿の打ち直しも殆ど行われることがない昨今、綿打ちの意味自体わからない人が大半なので、ぜひメニューに加えたいと思う一方、手作業による綿打ちの具体的な技法についてはわからないことが多く、当初は導入できるかどうか自信がありませんでしたが、展示の準備段階で丹羽正行氏に教を乞い、さらに当館のオープニングイベントの折にもう一度詳しくご指導いただくことができたので、試行錯誤をしながらなんとか実現することができました。参加者にも好評であったことに加え、以下に述べるように当初想定していな

かった思わぬ好結果を生みました。

◆糸紡ぎ

糸紡ぎは、本来習得するのに時間を要するもので、糸車の前に座っただけで誰でもすぐにできる訳ではありませんが、なんとなく不思議で見ているだけでも結構面白いものです。

手作業での綿打ちは非常に時間がかかるので、常時体験ができる体制にするため、専門業者に機械打ちしてもらった材料を用意しました。その際、一般的に米綿は和綿に比べて毛足が長く糸が紡ぎやすいといわれていることから、当民俗公園でとれた和綿に米綿を混合してもらいました。機械打ちの綿は一見して毛足も美しく梳き揃っており、当初はこの方が紡ぎやすいのではないかと想定していたのですが、実際に体験してもらおうと繊維が抜けやすい分、はじめての人だとなかなか作業が続きません。却って展示室で綿打ちした和綿の方がはじめての人でも紡ぎやすいことがわかり、これを使用することによって綿から糸になってゆく喜びをより多くの人に感じていただけたようです。

◆機織り

館蔵品の実測をもとに複製品を製作したもので行いました。「大和機」として知られる当地方の特色ある傾斜型の高機で、これに当館所蔵の明治時代の縞帳を参考に柄を決めましたが、糸は不特定多数の人が織ることも考え、無用のトラブルで時間をロスすることのないよう、太めの紡績糸（20/2 コーマ糸）を用いました。

まず、特別展のオープンとともに展示室で機掛け作業（モジリ作り、モジリ通し、箄通し、機上げ）を実演展示として行い、その後この機で来館者に体験していただきました。

これに加えて、織物研究室の協力を得て、八尾市で発見された天秤腰機の復元品を借用し、隣接する河内と大和の全く機構の違う機をその場で比較体験できたので、道具の特色や歴史的推移、地



▲体験コーナー（大和機と河内の天秤腰機）

域性などについても話が及び、その一層の理解に繋がりました。

以上の体験展示コーナーを設けて、結局最も有効であったと思うのは、展示する側と観覧者とがコミュニケーションを持ちやすい雰囲気を作り出したことです。体験希望者がいない間もスタッフはただ待機するのではなく、常ににかしら作業を行っていたことが、展示室の空気を温かで軽やかにしたものにしたようです。

スタッフ全員が俄か養成でなく、しっかりした染織技術の知識を身につけた人々であったことも、紡織作業にはつきもののトラブルに対する迅速な対処も含め、体験者に安心感をあたえることにつながり、全体を通じて重要な要素であったと思います。

この他、展示室では導入部に音で機仕事を体感するエフェクト装置を設置しました。かつて糸車を当地方で「ビービー」あるいは「ビービーチョン」とその作り出す音で呼んだり、緯糸を通す杼の車に古銭を合わせて取付け、経糸の間を杼がすべってゆくたびに「カラカラ」とよい音をたてるようになっていたり、機仕事の音はとても印象的で重要な要素です。糸紡ぎや機織りは、はじめから終わりまで同じ調子で作業を進めなければならない根仕事なので、道具が作り出す音はそのリズムを作り出す手掛かりであり、単調な仕事の中で気持ちを保ちつづける拠りどころとなるのです。

3. 体験学習講座

澤田絹子氏を講師に迎え、腰機で長さ約60cm×幅約30cmのテーブルセンターくらいの平織り木綿布を織り上げる工程を体験していただきました。

機織りの基本ともいえるもので、整経～織りの工程が短時間のうちに一通り体験でき、機の構造もシンプルなので、布が織り上がってゆく仕組み

を理解するのに適した方法といえ、当館ではこれまでも折に触れて行ってきました。しかし、参加者からは、一度体験するだけでは手順を追ってゆくの精一杯で何をやっているのかよくわからなかった、或いはもう一度自分でやってみたいが、工程が複雑でいっぺんには覚えきれない、といった感想も寄せられていました。

そこで、今回は織物研究室の授業で行われている方法をもとに、例年2日間の日程を3日に増やし、1日目を機の部品の一つである「腰あて」製作にあてました。腰あてを作る方法は、本番の機織りと全く同じ方法で、ただ全体の丈が短く、糸も太いので短時間で織り上げることができます。

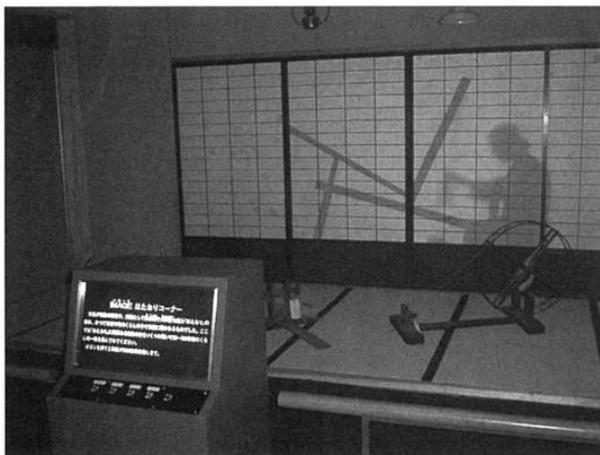
同じ工程を2度繰り返すことにより、1日目には難解だった作業一つ一つの意味についての理解が高まり、スムーズに行えるようになって、トラブルも減りました。全体を見通しながら作業にかかれる分、気持ちにゆとりができたことが大きいようです。

2日目は、10/6 コーマ糸を染めたもの10色を用意し、各自好きな色を組み合わせる簡単な縞の設計を行うことから始めたので縞織物が出来上がってゆく仕組みもあわせて学習でき、それぞれとても个性的で楽しい作品に仕上がりました。

なお、当館では体験に参加された方が家庭でも機織りを楽しめるように、機を組み立てる材料には、塩ビパイプ2本、綜統用の丸棒2本とたこ糸、中筒用としてラップの芯、打ち込み具は市販の定規とするなど、できるだけ身近で手に入りやすいものを使っています。

おわりに

上記のメニューの一つ一つは、特に目新しいものではありませんし、当館でもイベント的に単発ではこれまでも折に触れて行ってきたところで



▲エフェクト展示 (イメージはたおりコーナー)



▲体験学習1日目 腰あてを織る

す。しかしイベントは博物館へと足を向けていた
 だけ動機づけにはなっても、展示そのものへの興味、
 理解にはなかなか結び付かないのが実状です。

今回の展示では、オープニングイベントや体験
 学習に参加した人に、展示室での体験コーナーも
 併せて利用していただくよう積極的な働きかけな
 どをした結果、企画の趣旨がより明確に伝わり展
 示そのものに対する関心を深めていただくことが
 できました（イベント参加者の中にリピーターが
 多かったこともその例証となると思います）。

冒頭に、布を織るという技術がもはや生活の中
 にはなくなっているという意味のことを記しまし
 たが、当館が主に収集の対象とし、展示してきた
 民具の殆どは昭和30年代頃までのもので、素材は
 変化しても名称や形態を今日まで引き継いで使わ

れ続けているものはまだしも、その多くは今日決
 して「生活卑近のもの」ではなくなっていまいま
 した。どのようにしたら、よそよそしい未知の物体
 と化した民具を再び私たちの歴史の中によびもど
 すことができるか、そのための一つの手段として
 ハンズオンの導入やワークショップの開催は、今
 や必須のものと考えられているといっても過言で
 はないでしょう。

しかし、ものと人との対話の場であるべき博物
 館本来の機能が置き忘れられることなく、来館者
 の目を最終的には展示品そのものへと戻し、もの
 自身に対する興味へと導くことは、それほど簡単
 なことではないこともまた実感します。今後とも
 当館の展示全体の中で様々な試みを通じて追求し
 なければならない課題は多いと考えています。

特別講演会

近世大和の農民の知恵－綿作と「まわし・ならし」

講師：徳永光俊氏

大和の綿作は、夏期の田を乾田化して行う田方
 綿作を特色としていましたが、そのあり方をさら
 に詳細にみると大和（奈良盆地）農民の知恵の集
 積の上に周到に編み出されたシステムであったこ
 とがわかります。また、この「作りまわし」のシ
 ステムは大和農法の歴史的展開全体を読み解く重
 要な鍵でもあります。

本特別講演会では、大坂経済大学日本経済史研
 究所所長の徳永光俊氏をお招きし、主として15、
 6世紀以降現在にいたるまでの奈良盆地の農業と
 その変遷、その中に読み取れる全体を貫く一つの
 法則ともいべきものを明らかにし、また単に農
 業技術史というにとどまらず、当時の大和農民の
 家業としての農業への思い、或いは長年にわたる
 経験の中で会得した農業を基軸とした生き方、考
 え方（「百姓の道」）というべきものまでを含めた
 「農法史」という視点からのご講演をいただきました。

お話はさらに、現在～未来をも視野に入れた上
 で日本、さらに東アジアの農業という観点からど
 のように捉えられるのか、という点にも及び、大
 和の農業の歩みには、現代に生きる私達にとつ
 てもなお汲み取るべきものがあることを指摘されま
 した。

生命をつかさどる食物生産の要である農業を巡
 る諸問題は、まさに今日的な課題であり、聴講者
 の関心も高かったように思われます。

【講演要旨】

I. 「まわし」と「ならし」－山本家農書より－

山辺郡乙木村（現天理市）の大百姓であった山
 本喜三郎という人物が文政6年（1823）、子孫の
 ために記した『山本家百姓一切有近道』という記
 録がある（以下「山本家農書」とする）。

当時の農業技術や農家の暮らしなどを窺い知る
 ことのできる貴重な資料であるが、ここではその
 中にみえる「まわし」と「ならし」という言葉に
 注目したい。「まわし」とは循環のこと、「手回し
 がよい」などというふうにも使う。「ならし」と
 は平均化ということで、先を見越して労働や資本
 などをうまくならして間配ってゆくこと、当時の
 農家の経営管理のキーワードである。

II. 大和農法の作りまわし

「まわし」、田んぼを回してゆく技術、則ち作
 りまわし、学術用語としていうところの田畑輪換
 であるが、勿論当時こんな言葉は使わなかった。
 今日農家でいうところの「カラケ」という言葉も
 明治20年代からの言葉で江戸時代の記録にはで
 てこない。

江戸時代の作りまわしにおける代表的な畑作物
 が綿である。稲2年、綿1年を基本として、綿の
 価格など社会の経済条件に合わせながら臨機応変
 にうまくまわしてゆく仕組みがあり、それは村の
 規制のもとで行われていた。勝手に許されないとい
 うことは一見不自由にもみえるが、これが大和

の村の強さでもあった。

次に、田原本町宮古の石橋家の記録から窺える明治～大正の様子を挙げた。この中で特に注目されるのは、綿、早稲の作りまわしの間に空豆が挟まれていることである。また、その後明治30年前後に西瓜がみられる。いわゆる大和西瓜のはしりである。大和で本格的に西瓜が作られるようになるのは大正末頃、それまでは大坂での市場経済が十分整っていなかったため商品化には至っていない。空豆（蚕豆）は6, 7年に1回は作られている。空豆の栽培は16世紀頃には既にみえ「大和豆」といわれるくらい盛んに作られたようである。空豆は、大和の作りまわしを支える重要な鍵となる作物である。

明治末～大正、昭和へ至る間、「神力」（稲の品種）を作ることで奈良は日本で一番米のできるところになった。これがいわゆる「奈良段階」である。しかし、その一方で用水不足で全てを米にはできない事情は相変わらずであったから、綿がだめになった後、西瓜が登場するまでの間にはグロで梨や柿をつくる、また養蚕のよいときは桑を栽培するなどの試行錯誤の跡をうかがうことができる。

「大和農法」とは、(1) 用水不足にどう対応するか（自然条件）、(2) 新たに開発する余地がない（用地不足＝歴史条件）、(3) 「三都」という市場条件（経済条件）、以上の3つの条件に対応する中で作り回しの知恵を働かしてきたということができる。

ちなみに、その中で窺える大和（奈良盆地）の農民の特質を述べるならば「利に聡い（あきらめるのもはやい）」、「まとまらない、従って産地化しない（お上からの号令に従って一斉に右へ倣えにはならない）」というような点が特色として挙げられようか。しかし、そのことによって全滅することはなく、変化に対応しながら生き残ってゆくことができたともいえる。

昭和初期～昭和40年代、その後について田原本町秦庄の記録を辿ってみる。昭和3～9年の記録では、西瓜（大和西瓜）が作り回しの代表的畑作物で稲3年～4年、西瓜1年のブロックローテーションがみられる。また空豆の栽培もまだ続けられており、グロではぶどう栽培などが行われている。

次に、昭和23年（1948）～56年（1981）までの記録をみると、西瓜、空豆、アケボノ、金発など聞き覚えのある品種がならぶようになるが、ここで重要なことは昭和40年で空豆の栽培の記録が終わることである。すなわち400年間、裏作の空豆

はここまでずっと作り続けられてきた。そして農家の基本的な作りまわしの考え方は変わらなかったといえる。また、1967年には裏作がなくなりホウレンソウ、キュウリ、トマト、イチゴなどの栽培が行われるようになってゆくが、これは20年ほどで（市場で）負けてしまう。

Ⅲ. 大和農法の地域性・歴史性

—大和農業の展開の法—

奈良県の農家は自分自分で知恵を働かせることによって生き残ってきた。この「大和農法」は、15世紀あたりから形作られ始めた田畑輪換農法に始まる。すなわち恐らく15, 6世紀頃から始まると思われる瓜と稲に始まり、綿と稲の作りまわし、19世紀後半からは「神力」という品種とグロ、野菜と晩稲旭へと畑パターンを変えながら対応してゆくが、1960年代の終わり頃大和農法の作りまわしの終焉とともに、そのシステムを支えてきたキーワードとしての空豆も作られなくなり、野菜など施設園芸へと移行して現在に至る。

こうした地域社会をその実態からみてゆくと、その画期は、一般に教科書などでいわれるような明治、近代などの時代区分の見方だけでは捉えられないことがわかってくる。周期は大体500年ごとにあり、江戸時代（16世紀）が大きな画期、次が1960年代である。そして、変わり方には必ず一つのきまりがあるということである。

それはまず基盤整備から始まる。そして新しい条件が整ったところで肥料の投入ということがあり、深耕、土壌改善という循環がみられる。例えば大和の溜池の殆どは17世紀～18世紀頃の時期に作られ、次は明治20～30年代にピークがくる。一見農家が勝手にやっているように思えるが、1つのルールに従って行われているのである。これが農業の法（のり）というものである。19世紀の山本家の記録では備中鋤は、この頃村に2, 3丁とあり、この頃から備中鋤による深耕が広がってきたことが捉えられる。教科書がいうように農具の全てが元禄頃に改良され、使用されるようになったなどという見方は誤りである。

しかし、現在はこのルールが崩れてきた。それは自然条件等を見捨ててできる農業への変化ということである。つまり、人間が自然をコントロールする力の方が強くなって、自然条件に合わせながら行ってゆく知恵はいらなくなったのである。

この「農業の法」は大和だけではなく、東アジアにも当てはまるのである。作りまわしは、大和だけではなく東アジアにもあり、モンスーン地帯の中で同様の展開がみられる。例えば朝鮮半島で

も少し遅れて同じような品種が展開してくるが、勿論これは植民地下であるから、ということもあるが、植民地下でいくら強制しても作れないものは作れないのであり、定着するにはそれなりの必然性がある。

つまり、いままで述べてきたことは、東アジアにおいて共時的展開をみせているように思われる。1964年、1988年、2008年、これは東京、ソウル、北京のオリンピックイヤーであるが、これとほぼ同じような間隔で日本、韓国、中国の農業にも同じような展開がおこってゆくように見える。

現在の農業はグローバル化によって、アメリカによるアグリビジネス路線に握られている。安価な中国の野菜がどんどん入ってきて身近な大型店舗に並び、国産農作物が押されている状況だが、これも将来的にはそれほど展望はないように思われる。中国は広大で日本とは条件が違うようにみえても、(歴史的にみれば日本でおこったことが)遅れておこっているだけで同じ道を辿っている。

IV. 「百姓の道」

いままでの農業は、自然条件に合わせる、また合わせるだけでなくこれを農家の側もコントロールしてゆく、さらに社会的経済的条件にも合わせてゆく、という形で行われてきた。要はその折り合いのつけ方であり、うまくバランスを取りながら折り合ってきたのである。

今は、自然条件より経済条件のほうがどんどん大きくなって施設園芸、水耕栽培など、自然はそれほど考慮しなくても影響は少ない。

人工的農法は農家にとって必要、機械、農薬も必要である。作物が病気になっているときになにもしないというのは人間のエゴであり、その点では私は自然農法など採算を度外視したような農業には必ずしも与しない。

近年、身近でもここ郡山の^{はるみち}治道トマトなど、農家による新たな道を模索する活動が続けられているが、なかなか厳しい現状である。21世紀は大きな変わり目である。この転換点に変われなければ日本の農業は終わるのではないか。

今後も東アジアの農業の基本は家族経営にあると考える。家には蓄積された知恵が継承されている。

山本家農書は、他(の書物)からの引用ではないオリジナルな言葉で書かれている。その中に「百姓の道」という言葉がある。「只百姓ハ百姓の道を守るなり。たとへ何程下値でも此百姓を守るなり」「右の通り寒いと、百姓ハつらい物なれども、何の道でも同じ事。是行ひするなり」、これ

を百姓の道と考えたのである。農家の守るべきこと、「まわし」と「ならし」を進めていくこと、「家」の存続、これが各地の農家が苦勞しながら^{つか}掴んできた「百姓の道」であった。今日、「経済」に振り回されている現状の中で、もう一度この「百姓の道」について思いを致してみてもどうだろうか。

原理は「まわし」と「ならし」にあり、これは身のうち、家族、社会、宇宙の循環の中で生かされているということをつかむことである。「まわし」、「ならし」の根本にはカミ(目にはみえない力)への畏怖があった。戦後カミについていえなくなり、ただ知識だけを教えてきたのは誤りではなかったか。

現在は「まわし」「ならし」の考え方は破壊され、「循環」ではなく直線的に前へ、前へとただ突き進む考え方である。「最大多数の最大幸福」といわれるが、かつて(の伝統的社会)は全員の「中位の幸福」、全員が生きていくことのできる社会を目指してきた。「おかげさまで」というときの「おかげ」、「罰^{ばち}があたる」というときの「罰」、これは目に見えないものに畏怖を感じる言葉であり、縁の下の力、目には見えないものを認めることであった。

最後に、薄井清の『東京から農業が消えた日』の中にはこのようなことが書かれている。「はじめは腹で食った、次に口で食った、その次が目で食った、頭で食った」。では、皆さんはこれからは何で食うと思いますか？

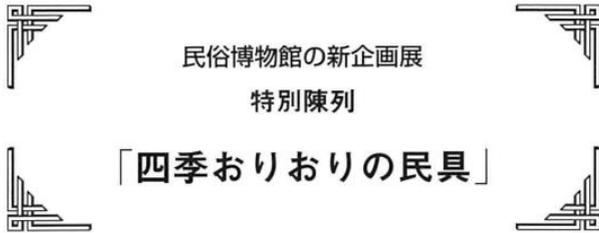
かつて農業とは、村や人との関係も含みこんだ営みであった。農業は単に職業の一つとしてあるのか、経済のためだけにするのであれば農業の将来は難しいといわなければならない。それでも続けている人があるというのは、経済だけでない、生き方としての農業の道があるのではないだろうか。

歴史的に大和の農家が経験したことは、全て日本列島の中でも非常に早いものであった。大和の農家の経験することは日本列島が経験し、東アジアが経験することである。

今、大和の農家が新しい道を見つけることが、未来の農業全体にも繋がるのではないだろうか。

*もっと知りたい人のために(参考文献)

- ・徳永光俊『日本農法史研究 畑と田の再結合のために』1997年 農山漁村文化協会
- ・徳永光俊『日本農法の水脈』1996年 農山漁村文化協会
- ・『日本農書全集』第28巻 1983年 農山漁村文化協会
- ・薄井清『東京から農業が消えた日』2000年 草思社



民俗博物館の新企画展
特別陳列

「四季おりおりの民具」

当館では、利用者の多様なニーズにお応えできるよう本年度後半期より、従来行ってきた企画展の一部内容をリニューアルいたしました。

当館には、現在までに収集し、登録整理を終えた有形民俗資料が約3万点余り所蔵されています。

従来これらをご紹介する機会として、年1回の「収蔵品展」を開催してまいりましたが、衣食住から生産生業、社会生活、人の一生、信仰・年中行事、遊戯・娯楽にいたるまで、幅広い内容を含む館蔵品を順次ご覧いただけるよう、「特別陳列」として、コンパクトでバラエティーに富んだ企画展を年3～4回行うこととしました。

平成15年12月13日からは、シリーズ「四季おりおりの民具」と題して、その季節にふさわしい民具を選んでご紹介してゆきます。どうぞご期待下さい。

◆「四季おりおりの民具」の展示予定

- I. 「絵馬と縁起物」
会期：平成15年12月13日(土)～16年2月22日(日)
- II. 「三月節供－雛祭り－」
会期：平成16年3月2日(火)～4月4日(日)
- III. 「五月節供と子供のまつり」
会期：平成16年4月17日(土)～6月27日(日)
- IV. 「夏の民具」
会期：平成16年7月17日(土)～8月29日(日)
- V. 「春を待つ間に」
会期：平成16年12月11日(土)～17年2月13日(日)

I. 『絵馬と縁起物』のご紹介

正月にちなみ、祈願や感謝の心を絵にして神仏に捧げる「絵馬」と招福開運の「縁起物」を展示いたします。

■西川コレクションの祈願・報賽ほうさい小絵馬

医師であった故 西川治郎兵衛氏が、病氣平癒に関わる庶民信仰資料として蒐集されたもので、昭和50年度(1975年度)、治郎兵衛氏のご子息である西川廉行氏より当館に寄贈されました。

絵馬の大半は、明治時代～第二次大戦前のもので、収集地は奈良県内のほか、栃木県、静岡県、東京都、愛知県、長野県、福井県、京都府、福岡県など全国各地にわたっています。寄贈された絵馬の総点数は300点近くにも上りますが、今回はその中から約150点を展示しています。

当時の小絵馬の多くはあり合わせの板などを利用した素朴なものでしたが、その絵柄や形は画一的になってしまった現在のものとはひと味もふた味も違う闊達さがあり、人々の祈り、願いが生々しく伝わってきます。

■親殿神社旧蔵奉獻絵馬

かつて、子供の誕生に際して氏子入りの意味を込めて 絵馬を奉納する習慣が、奈良盆地中南部に広くみられました。

当絵馬は、王寺町本町の親殿神社に奉納された江戸時代末～昭和34年代はじめ頃までの絵馬です。絵柄は、男児の場合は武者絵、女兒ならばジョウトンバ(尉と壘、高砂とも)が定番だったようです。

この他、大和高田市在住の絵馬師松岡弥三郎氏が製作・寄贈された祈願小絵馬の味わい深い絵柄もぜひご覧下さい。

縁起物ではエベッサンの吉兆(福箕、福笹)、旧奈良町の民家で長年にわたって祀られてきた台所の神々(恵比寿、大黒)、七福神、福助さん、縁起猿、火伏せの神として祀られた柿本人麻呂像など、また正月の「いただき膳」などの風習もあわせてご紹介いたします。

本展示を通して皆様の来るべき一年のご多幸をお祈りいたします。

民俗博物館・民俗公園からのお知らせ

- ビデオ上映会 平成16年3月13日(土)午後2時～
「新映像の紹介－杉皮と檜皮の利用」
(解説：当館主任学芸員 横山浩子)
- みんぱく梅林 ろうばい、紅梅、白梅約150本
見頃：2月中旬から3月中旬まで
- 民俗公園民家集落の茅葺き屋根の補修作業
平成16年1月6日～2月下旬(予定)
國中集落エリア(旧菰原家、旧赤土家離座敷)
「差し茅」という伝統的な方法で、茅葺き屋根の補修を行います。工事期間中上記民家内は立入禁止となりますが、作業の様子は園路から間近に見学できます。

奈良県立民俗博物館

〒639-1058 大和郡山市矢田町545 (大和民俗公園内)
TEL.0743-53-3171 FAX.0743-53-3173
開館時間：午前9時から午後5時まで(入館は4時30分まで)
※公園内民家集落の見学は午後4時まで
休館日：毎週月曜日(当日休日にあたる場合翌日に振替) 年末年始
観覧料 大人200円 学生150円 小人70円
※20名以上団体割引あり
※65才以上、身障者とその付添1名は無料
※毎週土曜日は小・中・高生は無料
※公園、民家園は無料
交通案内 近鉄郡山駅→奈良交通バスターミナル①のりば→(約15分)→「矢田東山」下車、北へ徒歩7分
駐車場あり(乗用車118台、バス18台、身障者優先3台)